令和3年度 学校評価総括表

奈良県立奈良情報商業高等学校・商業高等学校

教育目標	日本国憲法、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の基本精神に基づき、 人権を尊重する民主的な社会の形成者として、豊かな人間性と創造性を備えた生徒の育成を目指す。	総合評価
運営方針	生徒の学ぶ意欲を高め、魅力と活力ある学校作りのために教職員が一丸となって教育活動に取り組む。	B

令和2年度の成果と課題	本年度重点目標	具体的目標
基本的生活習慣の定着や規範意識の向上については、一定の成果はみられるが今後も引き続き「挨拶励行、正しい身だしなみ、時間厳守」の3項目について重点的に取り組む必要がある。販売実習や地域との交流を通じては、社会貢献度が高いと評価をいただいたが、さらなる地域の活性化に努めていきたい。また、学習面においては、教員の授業力向上を図り、生徒の学力向上や検定取得に向けた取組を深め、生徒が主体的に進路決定できる体制の整備に努める。	社会で通用する人材の育成	確かな学力の育成 ・「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善 ・ 資格取得の推進と確かな進路実現 豊かな人間性の育成 ・ 実学教育（キャリア教育）の充実 ・ 地域貢献活動を推進 ・ 人権感覚を高める取組を推進 たくましい心身の育成 ・ 食育の推進 ・ 部活動の活性化と人間力の向上

評価項目	具体的目標（評価小項目）	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価および改善方策
総務部	①各行事について関係諸団体や校内各分掌と連携を密に取り組む。	総務部内での役割分担を明確にすると共に、部員お互いが進捗状況を確認しながら協力して仕事を進める。	A	B	新型コロナウイルスの影響があったが、臨機応変に対応することができた。また部員間で分担しながら、協力して仕事を進めることができたが、特定の部員に仕事の偏りが見られた。	年度当初にしっかり役割分担し、お互い声掛けし、時間的なゆとりを持って進めていく事が重要である。	朝早くから校外の清掃に先生と生徒たちが協力して行っていることに感謝しています。地域に貢献していただいていることを継続されることがいろいろな面でよりいっそう改善されるのではないかと考えます。
	②環境美化を通じて公共心を育成すると共に感染症対策の啓発にも取り組む。	教室やトイレなど共用箇所について、正しく使用する必要性をHR等を通じて生徒に展開する。また各掃除箇所での石けんや消毒液の点検を徹底し、ポスターなどで感染症対策を周知し啓発を行う。	B		特にトイレなどは老朽化していることは否めないが、後から使用する人のことを考え、綺麗に正しく使用することや、ゴミの分別など今後も啓発していく必要がある。	石けんや消毒液の点検は、清掃担当者だけでなく総務部員は自ら少し意識して確認すれば、空になることを防ぐことができる。啓発は美化委員会活動の一環で、ポスターを描いてもらうことも検討したい。	
	③防災意識の向上	今後起こりうる様々な災害に向けて、普段から防災・減災意識を持つように、実践的な防災訓練を計画し実施する。	B		法律で定められている防災訓練は、コロナ禍で三密を避けながら最低限実施することができた。大震災を経験していない生徒達に、大震災の教訓を訴え続けなければならない。	年度当初の避難経路図掲示の際や、1.17、3.11に担任から少し話をしていただくことで、防災意識のさらなる向上を図り、生徒への啓発も行う。	
教務部	①基礎学力の充実	昨年度、コロナ禍により実施出来ていなかった朝学について、各学年で、内容の充実を図る。また、自ら学び自ら考える主体的な学習姿勢を育てるために、宿題・課題の内容の充実を図る。	A	B	朝学での学習が定着し、落ち着いた状態で1限目の授業を開始することが出来た。検定取得にもつながり、成果としては十分であった。検定や進路などについて体系的に整備していくことが課題。	第1学年では、予鈴からの5分を活用することにより、より朝学の効果があった。これを全学年に広げていきたい。	情報インフラが整っていることを利用し、リモートの授業を行っても快適に授業を行えるようにする。
	②授業力の向上	分かる授業の実践及び授業の工夫改善のため、年2回の公開授業並びに研究協議の実施に努める。また観点別評価について考察し、成績評価の在り方を検討する。	B		学習指導研究会後の研究協議や、観点別評価の研修を実施出来たが、学校全体での研修については不十分であった。特に観点別評価については、学校内での意思統一を図りたい。	各教科のシラバスに各観点の評価基準を明確にし、新しい教務内規の研修を実施していく。	
	③教育課程の検討	県立商業高校の開校後の教育課程を点検し、新学習指導要領を視野に入れた教育課程を検討する。	B		新課程と新しい学科編成について、目的とする学習内容、検定資格のロードマップなど、すべての教職員に理解してもらえているとは言い難い。	新年度の教育課程について、各教科で研修を行い、校内全体での情報共有を図りたい。	

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価および改善方策
生徒指導部	①正しい身だしなみに対する意識の向上	登下校時や授業の始業終業時、校門指導等を通じて、生徒の小さな変化を見逃さず、身だしなみ等についての指導を継続し、意識の向上を図る。	B	B	日頃からの多くの先生方の声かけにより生徒は比較的落ち着いている。1年生で制服が変更されたり、上級生も規定を変更したことによりこれまでとは違う点で指導する場面が増えている。	校門、昇降口、教室、授業時等多くの場面で多くの先生方がこれまで同様粘り強く声をかけていくことが最も大切だと考えている。	規則正しい生活を身につけさせることは、学校だけで取り組むだけでなく生徒を取り巻く家庭や社会の全ての人が協力して生徒を教えていける形を作っていくことが重要である。
	②礼法・マナーを身につけさせる指導	生徒が自分からが明るい挨拶ができる、きれいな言葉遣いを気をつけることができるようになるために、職員側からの声かけや注意、指導を活発に行っていく。	B		自分から挨拶できる生徒は多い。しかし、こちらからの声かけがないとできなかったり、人間関係がないとできないという生徒も多く、場面が変わったり面識がない人にはできないという生徒もみられる。	自分から挨拶できるということが当たり前になるよう、多くの場面でその意味を話していく事が必要である。生徒間でも活発に挨拶できるよう取り組んでいく。	
	③規則正しい生活習慣の確立	規則正しい生活習慣を身に付けさせることにより、遅刻や欠席・早退を減らす。遅刻については繰り返す生徒に対し、生活習慣の見直しや意識の改善を促し、時間を守る意識の向上を図る。	C		遅刻や欠席、早退等の数は増加した。特定の生徒が繰り返すことによって周囲に影響を与えている部分もある。新型コロナ感染症の影響により、学校に登校するということに対する意識の変化が感じられる。	遅刻を繰り返す特定の生徒へのアプローチが大切であるが、生徒によって事情が様々だあるため、画一的な方策は作りにくい。一人ひとりに対して丁寧な対応を継続できるようにする。	
進路指導部	①社会で通用する人間の育成	集会や面談などを通して自分を見つめさせ、生き方について考えさせる中で礼儀作法や思いやりの気持ちを持った人間を育成する	B	A	コロナ禍で集会や進路行事は十分に実施できなかった。就職講座や面談の中で、挨拶の重要性について再三伝えた。	生徒が興味・関心を示すような話題を中心とした行事を中心に進路実現につなげていきたい。礼儀作法の重要性についてはさらに伝えていきたい。	
	②就職先の開拓	企業との連携を密にし、求人の依頼と情報収集に努める。求人依頼状を150社以上に発送し、企業訪問および電話依頼を30社以上行う。	A		求人依頼状は150社に送付し、企業訪問は約50社実施した。	勤労の意義を伝えながら、新規企業開拓や企業指定校の増加を図りたい。	
	③進学者の増加	検定・資格を活用した入試制度などを積極的に利用し、大学進学者数の増加を目指す。	A		総合型選抜（旧AOや公募）を10人が利用し、一般入試には4人がチャレンジした。大学進学者は昨年度より10人増加した。	商業系の検定に加え英語・漢字検定などにも取り組ませる中で大学・短大進学者を増加させていきたい。	
人権教育部	①あらゆる差別に対しての生徒、職員の人権意識向上	新型コロナ肺炎に関連した暴言や差別的言辞に対し、感染症に関する人権啓発資料を準備し、生徒、職員が差別解消に向けた取り組みができる一助を担う。	B	B	日本赤十字、奈良県教育委員会により提供された資料に基づいて、管理職と相談しながら、生徒・職員への啓発をおこなうことができた。	次年度は新教科「公共」も導入されることから、身近な課題として、日本社会の陥りやすい問題点を具体的に示すことで、解決法を探らせていきたい。	
	②違いを豊かさにつなげるHR展開	各学年のHRを利用し、ネットリテラシー、性的マイノリティ、男女共同参画、在日外国人問題等を学習する機会を持ち、共生社会に向けた意識向上をめざす。	B		とくに1・2年生については、「なかまとともに」とともに「われら人間創造」をホームルームに活用できた。 1年生では積極的に改善案が検討された。	LGBTQの教材など、採用されてから10年となる指導案も多いので、指導案のアップ・トウ・デイトが検討されるべきである。	
	③先行きの見えない危機の時代に対応した進路保障	経済困難から大学生活をあきらめる事例が相次いでいることを受け、借金に頼る進学だけでなく、生徒が自立する方向を探り、進路保障について生徒の支援をおこなう。	B		日本学生支援機構の手続きを希望する生徒には、手続きを進めることができた。ただ、数名の生徒が希望を認められず、自費での進学を余儀なくされた。	生徒・保護者の制度理解が十分になるように、進路指導部も含めて3年生の担任が日本学生支援機構のシステムについての理解を深めるように研修をおこなう必要がある。	
文化図書部	①読書習慣の確立による基礎力の向上	親しみやすく魅力的な図書室作りに努め、1日の利用者30名以上を目標とする。朝の読書を実施することにより、落ち着いた学習態度を育成し基礎力の向上を図る。	A	A	図書室の1日あたりの利用者数は、30.6人であった。朝の読書を1学期と2学期に計画したが、全学年で取り組めたのは2学期だけであった。	朝の読書を年に2回実施できるよう検討する。実施時期や方法については学年と相談していきたい。	地域の図書館などの機関と連携を行うことで、そこで行われる催物に参加を探り、生徒の学習機会を増やすことを検討していく。
	②文化祭の充実・向上	生徒会・学年・文化部との連携を密にしながら、全校体制で文化祭に取り組み、生徒の積極的な活動を促すことによって、自主性と協調性を向上させる。	A		リモートによる開催となり、運営面での課題が多くみられた。生徒たちは制約が多い中ではあるが、工夫を凝らした発表を行っていた。	文化鑑賞会の実施を含め、時期や内容について検討をしていきたい。	
	③地域との連携	「桜井冬のプチ文化祭」等を通じて、地域及び他校との連携を深める。			昨年度に引き続き、感染症対策のため「桜井冬のプチ文化祭」は中止となった。	感染症対策のため、地域との連携を見合わせる状況が続いているが、新しい形での交流を検討していきたい。	

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価および改善方策
保健体育部	①体力の向上と部活動の活性化	トレーニング方法の工夫や事前指導を実施し体力テストで県平均を4種目以上上回る。女子の運動部加入率25%以上を目指す。	B	B	授業中のトレーニングや事前の指導を行ったがどの種目も県平均を下回った。女子の運動部加入率はマネージャーを入れて24．6%であった。	昨年度より引き続きコロナの影響で思うような授業が出来なかった。来年度も状況をふまえながら可能な限り授業で取り組んでいきたい。	食育について、摂取率が、向上するように一層の取組を期待します。健康的な暮らしができるように栄養のバランスも大切と思います。偏った食生活になっていないか適量を摂取できていないかなど、栄養に対しての意識づけも必要でないか。
	②保健指導の推進	教科保健の授業や保健だよりを通して、生徒の健康に対する意識を高める。各種検診の精検受診率20%以上を目指す。	B		保健だより等を通して意識を高める事が出来た。尿検診・運動器検診が20%を超えた。	保健だよりを有効に活用するためホームページへの掲載も考える。精検の重要性を知らせ担任を通じて連携を図り精検未受験者を減らしたい。	
	③食育の充実	教科保健の授業や食育だよりを通して、食育の充実を図る。朝食摂取率75%以上を目指す。	B		保健の授業や食育だよりを通して生徒に指導してきたが今年度は63．9%と昨年度より下がるという結果になった。	今まで以上に朝食の摂取の大切さを保健の授業や食育だより、または新しい取り組みを考える。	
商業科	①検定取得の向上	習熟別講座の開講と各種検定に向けた補充講座の充実を図り進路実現に繋げた指導を行う。教員個々に数値的な目標を設定する。全商検定1級三冠達成者20名を目指す。	B	B	全商検定1級三冠達成者20名を輩出することはできなかったが、例年に比べ上級検定合格者や努力する生徒が大幅に増加した。しかし、何一つ資格の取得ができなかった生徒への手立てが課題である。	分かる授業、授業で学ぶことが基本として資格取得をめざす。さらに、理解度に合わせた適切な習熟別講座を設ける。1年次から資格による進路の広がりを生徒に展開していく。	ネットで有名な起業家等の外部講師に講演をしてもらい、地域の方も参加してもらって情報インフラの最先端を行っていることを示し地域の中核になる 学校作りを考える。
	②実学教育の充実	学校設定科目「実学」において、外部講師による講話や体験的な学習を通し勤労観・職業観を育成する。 模擬株式会社たまつえを軸に、販売実習等といった地域と共に諸活動を行い、連携を深めていく。	B		外部講師による講話は有意義なものであった。また、コロナ禍でありながらも工夫をしながら、販売実習を行うことができた。学校設定科目「実学」において、計画の見直しが必要。	学校設定科目「実学」では、検討委員会において再度検討していく。次年度における各ビジネス科に即した外部講師による講座を企画する。販売実習では、これまでと同様に地域と連携して諸活動を進めていく。	
	③県立商業ビジネス学科の基盤構築	県立商業高校開校2年目に向けて、各ビジネス科における目標と教育内容の具体を明確にする。教員の専門的な教育力の向上に繋がる研修の充実を図る。	B		各ビジネス科の目標に合ったカリキュラムは完成することができた。また、専門的な指導を行うための研修も個々に行うことができた。ただし、次年度の各学科への人員配置が課題である。	専門性のあるカリキュラムのため、教員の指導力向上の研修は継続して行う必要がある。また、最高学年まで見通した授業担当ができるように配慮する。	
第1学年	県商生としての自覚と責任をもたせる	基本的な生活習慣（遅刻・欠席・提出物等）を確立させ、挨拶を励行する。	B	B	学年当初に比べると、一部の生徒の欠席、遅刻、提出物の不備が目立っているが、大部分の生徒については基本的な生活習慣が確立され、予鈴着席が徹底されていた。	一部生徒へのアプローチを担任のみならず、学年の教員が協力して行い、本人の意識を変えるため日々の声かけを継続する。	
	高校生活の目標を設定させる	正しい学習態度を身につけさせ、様々な進路に対応できるよう基礎学力の向上と各種検定資格の取得を目指す。	A		朝学の取り組み、検定の取り組みはどちらもこちらが思う以上に取り組むことができた。また外部講師による講演の中で資格取得に対する目的意識を持たせることができた。	ホームルーム等で普段からこつこつと学習する重要性を意識させ、学習する習慣を身に付けさせる。また検定試験にかかるカレンダーを作成し、可視化する。	
	連帯感・協調性や他者と支え合える社会性を身につけさせる。	学校行事に積極的に参加し、互いの違いや個性を認め合いながらクラス全体で努力できる仲間づくりに努める。	B		学校行事ではコロナ禍による制限がありながらもクラスだけでなく学年全体で協力する姿が見られた。	日々の生活の中ではまだまだ連帯感は薄いように思われるので、お互いによい距離感が保てるように個々の生徒の対人スキルをあげるよう取り組んでいく。	

評価項目	具体的目標 （評価小項目）	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価および改善方策
第2学年	基本的生活習慣と集団意識の確立	教育活動のあらゆる機会を通じて、真摯な態度でのぞませ、集団の一員であることの自覚と、個々の向上をめざす。	B	B	生活習慣の乱れや学校生活や学習への意識の低さなどにより、遅刻や欠席をする生徒が増えた。	生徒一人ひとりの実情を把握し、教員間はもとより保護者とも連携の上、生徒への声かけと目配りを今以上に行い、小さな成長を継続させ続けるよう促す。	
	基礎学力の向上	正しい学習態度を身につけさせ、自ら学びとる姿勢を育成し、進路に対応できる基礎学力の向上を図る。	B		検定取得や定期考査に向けての取り組みにおいて、高い目標設定を行い、その達成のために継続して努力する生徒が増えた。	生徒個人に応じた目標設定を行わせ、その達成のために自ら主体的に取り組むことができるようアドバイスを行う。	
	自主的な活動の育成	修学旅行を含めた特別活動などにおいて、生徒個々の特性に応じた活動の実践を促し、生き生きとした学校生活を送らせる。	A		二度延期にはなったものの修学旅行のクラス別活動の企画や、コロナ禍での文化祭の各クラスの発表などにおいて、創意工夫をこらし、協力・相談して活動することができた。	ルールや規則に則った上で、その中で工夫をして楽しむ習慣を付けさせる。そして、学校生活全般において積極的・主体的な取り組みを行う態度を養う。	
第3学年	基本的生活習慣と集団意識の確立	教育活動のあらゆる機会に真摯な態度でのぞみ、集団の一員としての自覚を持たせる。	B	B	コロナ禍による制約はあったが生徒会を中心に行事運営にリーダーシップを発揮させることができた。 2学期以降遅刻者数が増加したことが残念である。	コロナ禍で難しい面もあるが学年集会等を通して生徒に訴えることが大切である。	
	基礎学力の向上	前向きな学習態度と自ら学びとる姿勢を育成し、進路実現に対応できる基礎学力を向上させる。	A		朝学や考査前の補習を計画的に実施することができた。遅刻者に対して、基礎学力や思考力の向上に取り組ませた。	朝学については年間を通しての目標を早めに設定し、統一したテキストを準備したい。	
	自主的な活動の育成	集団の中で自分の役割を認識し、課せられた責任を果たす態度を身につけさせる。	A		進路実現に向けての取組を通して社会生活につながる知識やマナーを身につけさせることができた。文化祭や体育大会等の行事の中で自己の役割を果たすことを自覚させた。	コロナ禍で様々な制約があるが、インターンシップなどを通してマナー等を学ぶ機会が持てると良い。	
	進路の実現	進路目標を定め、その実現に向けて自主的に取り組む姿勢を育てる。	B		個人差はあったが進路指導部（担任の指導）の下、進路実現に向けて積極的に取り組ませることができた。	進路指導部が中心となって新たな進路が開拓できた。今後も継続していただきたい。	